
なのはStS再構成SS 『COMBINATION ATTACK!!』

枇紗簾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なのはStS再構成SS『COMBINATION ATTAC

K!!!』

【Zコード】

N9420X

【作者名】

枇紗簾

【あらすじ】

なのはStS再構成物。リンクとティオールというオリジナルキャラクターを加えて物語が進行していきます。リンクとスバルの恋愛を綴つてたりもなきしにもあらず…。

物語が進行していく中でリンクとスバルの恋愛模様を番外編でお届けします。お惚気話注意。

主がめんどくさがりやで暢気なので、ノロノロと続けていく形になりますが、どうか生暖かい目線で見守ってください。

それでは、リンクとスバルが最高のコンビネーションを目指す物語、
始まります。

序章「出会い、そして模擬戦」（前書き）

【更新】細かく更新して出していったのですが、一個に纏めた方が良いかなと思い纏めました。

始めまして、おはよひ〜ります、こんにちは、こんばんわ、お久しぶりです…思いつく挨拶を並べてみる。
枇紗簾と申します。『びしゃす』と読んで下さ〜。

初作品ならびに本編半分くらいまでしか見てないぜーの状態で作られ始めたこのSS。もうぐだぐだなんてもんじゃありません。
所々知識が間違つてたりセカンドモードじゃないと使えない魔法を普通に使ってたり。原作ブレイクにもほどがあるつー！

ほんとにぐだぐだです。原作に心入れてる人は切れる可能性あります（え
そこはそういうだらーと突つ込みがありましたらコメントの方に）。

せめてボケ返せる位の突つ込みで宜しくお願ひ致します（え
誤字、脱字発見したらお知らせください。多分1週間以内には直します。

長らく愚痴を書きました。本編をお楽しみ下さ〜。

序章「出会い、そして模擬戦」

ティアナ「ここが機動六課…」

ティアナが大きな建物のエントランスで眩きをもらした。

スバル「ほら、早く行かないと最初の集合に間に合わないよつ」

ティアナ「遅刻寸前まで家の布団から出てこなかつたのあんたじやない！私は悪くないわ！」

ティアナの軽い拳骨がスバルの後頭部に当たられる。

スバル「いたつ、ティア、ひどいよお…」

ティアナ「泣いてる暇があるなら走りなさいーホントに遅刻しちゃうわよ！」

スバル「ふえつ、ティア、置いてかないでよおーつ！」

ティアナとスバルはお互いを罵倒しながら、それでも顔には笑顔を浮かべ、笑いながら走っていく。

それがある一室でカメラを使い観察している者がいた。

はやて「ほんまにだいじょうぶやろなあ・・・」

機動六課設立者兼部隊長のはやはては心配気に眩いた。

ここが機動六課…ね…

そして、新しい者が機動六課の扉を叩く。

なのはStS再構成SS「COMBINATION ATTACK
!...」序章『出会い、そして模擬戦』

はやて「選び抜かれた者たち、ようこそ機動六課へ、私は部隊長の八神はやてや、よろしくたのむな」

なのは「始めてまして、高町なのはです。主に皆の身の回りの世話をしてゆくので何か困ったことがあつたら遠慮なく言ってね、よろしくおねがいします、で、フュイトちゃんは？」

はやて「いまあと一人迎えに行つてゐ、じきに来るやひ」

なのは「そつか、じやあ一足先に皆に自己紹介してもうりおつかな。出身とランクくらいでいいか」

ティアナ「では私から。私はティアナ・ランスター。ミッドチルダ西部エルセア出身で、魔術ランクは陸戦C。銃撃を主体にしています。これから一年間、よろしくおねがいします」

スバル「私はスバル＝ナカジマ。ミッドチルダ西部エルセア出身の魔術ランクはティアナと同じく陸戦Cです。近接戦闘を主体に戦っています、よろしくおねがいします」

はやて「ん・・・スバル＝ナカジマといえば・・・」

なのは「管理局では『二色の閃光』って通り名で有名じやない？相方はなんて名前だったつけ・・・」

スバル「リンク＝ザ＝フォンティナですね、彼は私の昔からの友人です」

そういうつた瞬間に、はやてとなのはは動きを止める。

ティアナ「・・・どうしました？」

はやて「・・・いやあ」

なのは「偶然つてほんとにあるんだなつて」

ティアナとスバルは首をかしげる、そんな時だつた。

フェイト「ただいま」。連れてきたよ～

なのは「おかえり～。後ろにいる男の子がそうかな？」

スバルとティアナは男の子なんだ・・・と視線を動かす。

スバル・ティアナ「・・・え？」

リンク「・・・本日付で機動六課に配属されました、リンク＝ザ＝

フォンティナです、よろしくおねがいしま・・・ってえ？スバル？
ティアナ？」

スバル達がよく見知った顔が、そこにあつた。

はやて「これはまあ・・・何たる偶然」

なのは「『一色の閃光』の二人がここで揃うとは予想外だね・・・」

リンク「『一色の閃光』・・・それって僕達のことですか？」

はやて「そうや、君たち、中々に管理局の中では有名もんやで？」

スバル・リンク「・・・知らなかつた・・・」

はやて「なんや、自分達がそこまで強くないとおもつとるんか、二

人でのコンビネーション攻撃は技術ランク的にAAオーバーやで？」

ティアナ「ええつ！凄いじゃない、スバル！」

スバル「ええ・・・私はリンの言うこと聴いてるだけだよ・・・？」

リンク「気安くあだ名で呼ぶな・・・俺は場に合わせて攻撃プランを練つてるだけだ」

なのは「・・・あんな魔力弾が大量に飛び交う中で攻撃プランを練つてるの？」

リンク「回避だけには自信があるんで。自分は作戦を組み立ててスバルに実行してもらい、それに自分のタイミングを合わせているだけです」

なのは「タイミングって・・・「ああつ！・・・」ってどうしたの？はやてちゃん！？」

はやて「もしやあんた・・・『グッドタイミング』の名で知られる・

・あのリンクかあつ！？」

リンク「ええ・・・なんかそう呼ばれてるみたいですね、ていうか部隊長、僕を引き抜く際にそういう情報はなかつたんですか？」

はやて「書類見ただけでビビッときたんでなあ・・・忘れてたわ」

リンク「はあ・・・じゃあ改めて自己紹介させていただきますね。

僕の名前はリンク＝ザ＝フォンティナ。仲間達からはリンの名称で呼ばっています。執務官学校「所属」だつた者で、ミッドチルダ出身・・・詳しい場所は知りませんが・・・魔術ランクはB+、スバルと同じ近代ベルカ近接式です。よろしくおねがいします。

なのは「・・・執務官学校所属だつた者つて？」

リンク「はやて部隊長に引き抜かれたときに、学校には一時退学兼留学しているという風に伝えてあるんです」

フェイト「・・・なぜはやて部隊長の引き抜きに応じたの？」

リンク「貴方の傍で仕事を見たいからです、フェイト執務官」

フェイト「・・・えつ？ 私？」

なのは「ああ・・・フェイトちゃんは執務官だからね・・・なるほど、いろいろと学びに来たんだね。ティアナも執務官志望だつたつけ？」

ティアナ「ええ・・・そうですが？」

リンク「ティアナほど自分は技術がないんで、いろいろと教えてください」

ティアナ「・・・せりげなく嘘つくんじゃないわよ、どう考えてもあんたのほうが指揮技術は上じやない」

リンク「団体は指揮したことがなくてね・・・僕はティアナの指示通りに動くからさ」

ティアナ「・・・私がリーダーなの？」

はやて「そうや、この機動六課フォワード陣は、あんたがまとめるんやで」

スバル・リンク「「ティアナ、よろしく（な）！」」

ティアナ「・・・ふう、わかりました、これからよろしく頼むわよ、みんな」

リンク「・・・ところで、あそこで遊んでる子供3人は？」

フェイト「ああ・・・あれも貴方たちの仲間よ、おーい、エリオー、

キヤロー、ティオー」

？？？「「「はーい！」」」

子供3人がフェイトの声に反応しきりにかけてくる。

リンク「・・・」の子達は？

フェイト「うーん・・・私の家族の3人かな、こっちの男の子がエリオ。この女の子がキャロ。最後の女の子がティオールっていうんだ」

エリオ「あなた方が今日から私たちのお兄ちゃん、お姉ちゃんになるのですか？」

リンク、スバルティアナとの噴出す。

スバル「どどど、どういうことですか！？ フェイト執務官！」
はやて「これから同じ部隊で戦うんや、家族も同然やろ？ べつにいやないか、なあ、なのはちゃん？」

なのは「リンクくんは弟と妹が出来て満更でもない顔してるけどね」

ティアナ「・・・リンクって口リコンだつたのか・・・」

リンク「違うわっ！・・・つと、君達が今日から家族になる子たちなんだね。よろしくおねがいします・・・かな？」

エリオ「・・・お兄ちゃんつて呼んでも良いのですか？」

リンク「おお、呼べ呼べ、好きにしたら良い、だつてお兄ちゃんになるんだから。ね？ フェイト執務官？」

フェイト「・・・案外リンクが面倒見てくれそうで助かるわ。その子達、よろしくね」

リンク「ええ、任せてくださいな」

スバル「・・・リンクの適応力が凄い」

ティアナ「私たちじゃあんなこと出来ないよ・・・
軽く凹む二人であった。

リンク「・・・ここは？」
なのは「訓練施設だよ？」

リンク「・・・どうみても全員が動き回れるスペースではないのです
すが」

なのは「ふふつ、みててね」

そういうとなのはは手元にあるコンソールを叩いた、その瞬間。
スバル「・・・おおつ！？」

ティアナ「なにつ・・・これ・・・つー？」

リンク「一瞬にしてビル群のステージに・・・！」

なのは「ここは管理局の最先端技術を使って作った訓練施設だよ。
実態があるから触れるし、訓練にはもつてこいだね」

フォワード陣は驚きで声が出せない。さらにそこにはどめが入った。
なのは「皆には今からここで、私一人を相手に模擬戦をしてもらいま
す」

顎が外れるぐらいにあんぐりするフォワード陣。

なんせ管理局のエース・オブ・エースと呼ばれる女性だ、勝てるわ
けがない。

なのは「今日は皆の腕を見るだけだから、攻撃は特にしないよ、皆
で協力して私に一発入れたら今日は終わり。簡単でしょ？」
彼女が鉄壁のプロテクションを持つているのをフォワード陣は事前
から知っている。全員でかかっても勝てるかどうか・・・
リンク「・・・分かりました。やりましょう」

ティアナ「リンク！？やる気なの！？」

リンク「逃げても仕方ないだろ、やれることやつて情報取つてもら
つて最適な訓練をしてもらうのが最善だと思うけど？」

なのは「その通り、これで大体の皆の長所とか短所とか一気に掴ま
せて貰うから、全力全開で私に突っ込んできてつ！！」

「――――はいつ――――――」

全員分の声が響く。そこでリンクは気づく。

リンク「そういうやエリオ達の紹介を聞いてないな。仲間の力は知つ
ておいたほうが良い、頼むよ」

エリオ「・・・あつはい！僕の名前はエリオ・モンティアルです。

陸戦Bランクの近代ベルカ近接式です」

キヤロ「ええと・・・私の名前はキヤロ・ル・ルシエです。陸戦C + ランクの竜召還士です、この子が私の友達、フリードです」

フリード「きゅくー」

竜召還士か、珍しいなと思いながらリンクは最後の少女に目を向ける。

ティオール「私の名前はティオール＝ランドルク！空戦B・ランクの近代ミッドチルダ式だよつ気軽にティオって呼んでねつ。りんにい！」

リンク「りんにいっ・・・！？まあいいか、これからよろしく頼むよ

「「「はいっ！」」

なのは「まだみんな自分専用のデバイス持つてないよね？スバルのリボルバーナックルはともかく、リンクのは支給されたデバイス？」リンク「ええ、学校から支給された奴です。メンテナンスでも？」なのは「いいえ、今回の結果から皆に合つたインテリジェントデバイスを作ろうと思つた。これから皆は前線で戦うのに一人じゃ辛いから、人工知能をもつたデバイスで補おうと思つて」全員の顔が晴れる。

スバル「皆のを作つてもらえるんですかっ！」

なのは「ええ、前線で戦つてもらえる貴方たちになら、開発費のちよつとやそつとは動かせるよ。皆も、どんなデバイスにしようか考えておいてね」

「「「「はいっ！」」」

なのは「じゃあ模擬戦を始めよつか。みんなバリアジャケットをまとつて！」

それを合図に、皆の服装が変わり、それぞれのストレージデバイスが構築される。

リンク「スバルと俺はお揃いなんだよね」

スバル「おそろつ・・・！？こんな時に何言つてのさうんつー？」

なぜかスバルは顔を赤くしている。なんでだろうか？

ティアナ「昔からリンクの鈍感は凄いわね・・・」

リンク「ん、何か言つたか？」

ティアナ「貴方が馬鹿と言つたのよ」

リンク「おい」

なのは「ほらほらみんな～つ、配置について！」

ひとまず僕らは所定の位置につく。

エリオは槍、キヤロは手袋、ティオは杖らしい。

リンク「槍か・・・男の口マンだな・・・」

なのは「じゃあいつくよ～つ！模擬戦、スタートっ！！」
そして俺らは、同時になのはさんに向かつて突撃していく

ティアナ「リンクはスバルと一緒にウイングロードで突撃！！進路は任せるわ。エリオ！キヤロ！ティオ！貴方たちは私と一緒にリンクとスバルの援護！『一色の閃光』の実力、見せてもらいなさいっ！」

「――はいっ――」「――

なのは「さて・・・コンビネーション、見せてもらひよっ――」

そういうながらなのはは、一気に30機歩ほどのアクセルシユーターを出す。

リンク「攻撃しないって言つてなかつたつけ・・・まあいや、スバル！放物線上にロードよろしく！！」

スバル「了解！！」

ズドンッ！！とスバルがその場で地面を叩くと水色の魔法で作られた道がなのはに向かつて伸び始める。

リンク「いくぞ！スバル！」

スバル「おりやああ～！」

リンクとスバルはウイングロードを一人で並走してなのはに怒涛の

スピードで突撃していく。

なのは「はやいつ・・・・！」でもまだまだ！！」

なのはは10機ほどのアクセルシユーターをリンクたちに放つ。

しかしリンクはその攻撃を読んでいて、スバルに作戦を開始させる。

リンク「行くぞスバル！！作戦ナンバー003、フォーメーション
『O！』

スバル「了解つ！！それえつ！！」

突如リンク達が乗っていたウイングロードが裂け、リンクが乗つて
いたロードはリンクを上へ跳ね除けるような動きに、スバルのほう
は下のほうへ伸び、さらにスバルを加速させる。なのはが放つたア
クセルシユーターは何もない空間を過ぎていく。

なのは「なつ！？」

リンクがロードから離れ放物線上になのはに襲い掛かる。

リンク「うおおおおおつ！！」

なのは「くつ・・・・」

なのはは20機残っていたアクセルシユーターをリンクに向かって
放ち、プロテクションで身を固める。リンクは一気に打ち出された
アクセルシユーターをものともせず、こちらに突っ込んでくる。
なのは「これだけの数の魔力弾をみて動搖しないなんて・・・さす
がりん「今だつ！！スバル！！」・・・えつ！？」

なのはが振り返ると、リングと同じように放物線を描きながら飛んで
くるスバルの姿があつた。

なのは「はやいつ・・・・レイジングハート！防衛よろしく！」

レイジングハート（了解です、マスター）

アクセルシユーターを破つたリングと、不意を付いて後ろから殴り
かかった二人のナックルが、なのはのプロテクションに突き刺さる。
エリオ「・・・一人とも凄い・・・」

キヤロ「息がすごい合ってる・・・」

ティオ「りんにいかつこいい！がんばれ！」

ティアナ「あいつらのコンビネーションには付いていけないわ・・・

まつたく・・・

エリオ・キャロ・ティオは憧れの目、ティアナは呆れ半分の苦笑いを浮かべた。

なのは（なかなかにやるね、レイジングハート）

レイジングハート（でも、マスターには敵いません）

なのは（ええ？私これでもかなり限界だよ？）

レイジングハート（今の貴方にはリミッターが付いてますから。付いてなかつたら先ほどのアクセルシューーターも外さなかつたでしょう？）

なのは（あはは・・・さて、レイジングハート、どうする？）

レイジングハート（防御は私がやりますので、『元自由』）

なのは（うん、ありがと。レイジングハート）

リンク「うおおっ・・・かつてえええっ！…」

スバル「おりやああああっ！…全然碎けないよっ！…」

周りは煙に巻かれて見えない、そんな時にリンクは一瞬だが、プロテクション内から大きな光をみた。

リンク（あれは・・・まさかっ！？）

思い当たる節を見つけるとスバルに向かって叫んだ。

リンク「一旦引くぞ！…なんかやばい！…」

なのは「御名答」

スバル「…・うおっ！？何あれっ！」

なのはの持つレイジングハートの先端は既に砲撃モードに入つており克既に砲撃魔法の準備が整つていた。

なのは「身に痛みを知るつていうのも訓練だから」

リンク「・・・ティアナ、エリオ、キャロ、ティオー・援護を！…」

「…「はいっ！…」」

既にリンクとスバルが作った5層プロテクションの上にさらに5層

のプロテクションがかかる。

なのは「そんなもので防げると思つてゐるの?」

リンク「え・・・」

既になのはの魔方陣は完成しており、腕を振り下ろせば放てるという状態だ。回避は不可能。

なのは「じゃあ受け止めてね!!私の全力全開!!アクセル・・・ディバイン・・・バスター――ツ!!」

なのはの前面からアクセルシユーターをまとったディバインバスターがリンクたちの張つたプロテクションに激突する。

ティアナ・エリオ・キャロ・ティオ「うぐぐぐうう・・・

ティアナ達が張つたプロテクションが1枚・・・2枚と徐々に破壊されていく。

そしてリンクたちが張つたプロテクションに差し掛かった。

リンク「うおお・・・!!なんつー威力・・・!!

スバル「このままじゃ防ぎ切れないよ・・・どうじようつ――」

リンク「・・・スバル、ウイングロード出せるか?」

スバル「・・・何する気?」

リンク「最後のプロテクションが割れた瞬間に俺とお前でウイングロードを使用したパンチを叩き込む」

スバル「・・・危険な賭けだねそれ・・・」

リンク「でも、やつてみなきゃわかんねえだろ?」(元)「やつ」

スバル「・・・リンのにやにや顔気持ち悪い」

リンク「ひでえなあ・・・で、やつてみるか?」

スバル「ええ・・・いくよつ!!」

ウイングロードが砲撃の下をなのはの方向へ走つていく。砲撃中のなのはも戸惑いを隠せない。

なのは「・・・何する気なんだろ・・・レイジングハート!!出力UP!!」

レイジングハート「all light my master」

さらに砲撃の威力が上がる。2個プロテクションが吹つ飛んだ。残

り一つ。

リンク「せーのでいくぞ！スバル！！」

スバル「準備OKえ！！」

リンク・スバル「せえーのつー！」

パリン。最後のプロテクションが割れる。桜色の壁が迫ってきているというのに2人は怖さを感じなかつた。

・・・ズドンッ！！

二人の小さい拳が、大きな砲撃に突き刺さる。小さいながらも、砲撃を押し返していく。

なのはは驚きを隠せない。

なのは「プロテクション無しで砲撃を防いでるのつー？無茶苦茶だよつー！」

さらに出力がヒョする。

リンク「うおおおおおおおおつー！」

スバル「うあああああああつー！」

既に一人の姿は見えない。しかし彼は聞いた。

リンク・スバル「今だー！エリオーー！」

エリオ「・・・つー！ソニックムーヴーー！」

エリオが槍型デバイスを構えて突進する。

なのは「なつー！」

なのはが気づく頃には遅かつた。

プロテクションを起動するが一足エリオが早かつた。

プロテクションに阻まれ槍型デバイスは動きを止めたが・・・なのはの腰に僅かながらエリオの槍が食い込んでいた

なのは「まったく・・・なんであんな無茶するかな、はあー」
なのははため息混じりに首を振った。

シャーリー「でも良い結果が取れましたよ」

なのは「でもさあ・・・肝心のリンクとスバルが怪我しちゃねえ・・・

・

シャーリー「怪我させるような攻撃をしたのはなのはさんですよ（ニヤニヤ）」

なのは「・・・うー」

・

リンクとスバルは動けないのかボロボロのバリアジャケットのまんま担架に乗せられて医療室に向かった。

運ばれてる最中、リンクはスバルに話しかけた。

リンク「俺ら、頑張ったな」

スバル「うん、頑張ったよ」

二人は運ばれながら、子供のような笑みを浮かべていた。

序章「出会い、そして模擬戦」（後書き）

この「S」はオリジナルキャラクターを加えての再構成になります。
この「S」はオリジナルキャラクターを加えての再構成になります。
大事なので2回言いました。

忘れてましたよ…

オリジナルキャラクターとか要らないから…と思つ方はなのはシリ
ーズで好きなカップリングを載せコメントに。○
もしかしたらR-15指定入った甘々話を番外編で書くかも。
というかえろいの好きなんで言われたら書きます。ええ（断言）
主はエロイラスト描くときだけ本領が出るのですが、もしかしたら
文もそうなんじゃないかなあ…と。
言われなくてもリンクとスバルの惚氣話は番外編で書くよ…。

なのはStS再構成SS「COMBINATION ATTACK!!」序章

大まかなオリジナルキャラクターの紹介です。

なのはStS再構成SS「COMBINATION ATTACK!!」序章

リンク＝ザ＝フォンティナ

本作の主人公その1。近代ベルカ陸戦近接式魔術ランクB+、魔力ランクA-の執務官「志望」だった少年。18歳。

執務官育成学校所属中だった彼に、機動六課を設立したハ神はやてが目を付け半場強引に引き抜き。

彼自身は引き抜かれたことに反論はせず、むしろ憧れのフェイト執務官の仕事を間近で見ることが出来ると知つて軽く興奮気味。

本作では試験さえ受けて合格すれば執務官になれるので執務官学校に1年機動六課に留学させてもらうということで話がついている。

名前の通り、幼い頃からタイミングを合わせることが得意で、いまや時空管理局のヴィータ副隊長の突撃にすら合わせることが出来るようだ。

コンビネーション能力はずば抜けて高い能力を持つている。

彼の専用デバイスはまだないが、執務官が戦闘を行うこともあるので学校で支給されたスバルと同じナックル型のストレージデバイスを使っている。

スバルとは昔から仲のよい友達で、訓練で危険度が低いロストロギアの収集でたまに一緒になり、恐るべきコンビネーションを発揮し中々の知名度を持っている、仲間や管理局には「2色の閃光」という名前で呼ばれているほどだ。

リンクは執務官志望だったためか、その場にあわせた攻撃コンビネーションを即座に作り出すことが出来る。スバルと同じく近接攻撃しか持ち合わせていないため（後々砲撃を使うようになる予定）基本的にスバルと一緒にウイングロードで突撃する方法になつていて（まだリンクはウイングロードを使えないため、スバルのウイング

ロードに乗っている)

得意技 コンビネーションアタック・相手の動きに合わせること
友人からはリンの名で呼ばれることが今度多くなるだろう。

ティオール＝ランドルク

本作の主人公その2。近代ミッドチルダ広域砲撃式魔術ランクB - 、魔力ランクA - の女の子。10歳。

ある次元で勤務中のフェイト・T・ハラオウンに助けられ、身寄りのなかつたティオールはそのままフェイト・T・ハラオウンについてくることに。

テスターの教育で、ライトニング部隊として機動六課に加入。主に後方からの援護を得意にしている。

大掛かりな砲撃魔法は使えないが、アクセルシューター、バインドなどの基本魔法のコントロールだけはなのはたちと同じくらいのA A + ほどのずば抜けた能力を持っている。しかし機動力等がないので、技術的にはB - ほどに落ち込む。

テスターの育てられたせいか、好奇心旺盛で明るい女の子である。それと同時に場の空気を和らげるムードメーカー、ないしトラブルメーカーもある。

アクセルシューターを思念誘導し、見えない数キロ先の的にぶつけることが出来るので、広域探索魔法や結界魔法など、補助的な魔法が多く取り揃えられている。

得意技 遠距離からのアクセルシューター 思念制御
なのはたちからはティオと呼ばれている。

なのはStS再構成SS「COMBINATION ATTACK!!」序章

大規模模擬戦編に入ります。

大規模模擬戦編です。

アニメとは違い、早くもデバイスが完成します。
でもまだ調整中なので調子が整つてなかつたり。
それによつてある人がトラブルに巻き込まれます。

なのはなS再構成SS「COMBINATION ATTACK!!」1章

俺達が機動六課に配属されてから一週間が経つた。

だんだん慣れてきた俺は、フォワード陣だけの時は自分の事を俺と呼ぶようになっていた。まったく適応力といつもの恐ろしい。

そんなこんなで一週間。訓練と簡単な任務をこなしていた俺たちだが、どういうわけかフォワード陣が持っていたストレージデバイスが偶然にも同時に壊れてしまった。

なのはさんの話によると殆ど皆の新しいデバイスは出来ているらしい、今日から新しいデバイスで訓練をするので、皆を引き連れて開発室にまで来いという通信があった。

リンク「・・・と、俺は誰に説明してるんだ」

スバル「リンク? 何をぶつぶつ言つてゐるの? もう着いたよ?」

リンク「つと」

気がつくと既に開発室の前まで来ていた。

ティアナ「失礼します、機動六課フォワード部隊です」

なのは・シャーリー「いらっしゃーい」

身近な机でお茶を飲んでる、なのはさんとシャーリーさんの姿があった。

なのは「全員来たね。ちょうど良べ皆の新しいデバイスが完成したよ」

シャーリー「どうぞいらっしゃーく」

なのはさんとシャーリーさんに連れられ、開発室の奥へと進んでいく。

リンク「これは・・・」

比較的大きな広間に、巨大な試験管のような容器が六角形の形で並

んでいた。

ティアナ「これが・・・私たちの新しいデバイス・・・」
なのは「皆の戦闘スタイルに合つよう」に調整してあるからね。こないだの模擬戦を見る限り今までのデバイスと同じ形態のデバイスのほうが良いかなって思つたし」

スバル「・・・ナックル型のデバイスが一つあるよ?」

シャーリー「スバルとリンクのよ? 良かつたじやないスバル、新しいデバイスでもリンクと一緒に? (ニヤニヤ)」

スバル「・・・ふええ・・・//」

顔を真っ赤にさせるスバル。俺には理解できないが、何か恥ずかしいことでもあつたのだろうか。

リンク「・・・ナックル型の俺たちは靴も新調ですか?」

シャーリー「ええ。というかその靴が貴方たちのデバイスの本体よ。それとナックルをあわせて一つのデバイスとでも言つた方が良いかも知れないわね」

なのは「・・・さて、皆、自分たちのデバイスの前に立つて。そして自分達が考えた名前を呼んであげるのよ」

「「「「「はいっ」」」」

ティアナ「マスター認証、ティアナ・ランスター。デバイス名、クロスミラージュ・・・おいで」

クロスミラージュ（・・・貴方が新しいマスターですね。これからよろしくお願いします）

エリオ「マスター認証、エリオ・モンティアル。デバイス名、ストラーダ。よろしくね！」

ストラーダ（元気なマスターだな、よろしく頼む）

キャロ「マスター認証、キャロ・ル・ルシエ。デバイス名、ケリュ

ケイオン。よろしくだよ。ケリュケイオン」

ケリュケイオン（貴方は私が守つてみせましよう）

ティオ「マスター認証つ、ティオール＝ランドルク＝デバイス名、
インフィ＝ティ・ハート！よろしくつ、インフィちゃんつ！！」
インフィ＝ティハート（可愛らしいマスターですね、よろしくお願
いします）

スバル「マスター認証。スバル＝ナカジマ。デバイス名、リボルバ
－ナックル及び、マッハキャリバー。よろしくだよ、マッハキャリ
バー。」
マッハキャリバー（貴方と最速を田描しましょう。よろしくお願
いします）

リンク「最後は俺だな。マスター認証。リンク＝ザ＝フォンティナ。
デバイス名、シリンドーナックル及び、ブラストキャリバー。よろ
しく頼むよ
ブラストキャリバー（姉のマッハキャリバー共々、よろしくお願
いします）

リンク「・・・なんだって？」

ブラストキャリバー（マッハキャリバーと私は姉妹です）

スバル「・・・えええつ！？」

なのは「姉妹関係の方が上手く合わせられるかなと思つて」

シャーリー「コンビネーションが命な貴方たちにはぴつたりね」

リンク「・・・はあ、まあいいや。スバル」

スバル「・・・ふえつ／＼、ななな・・・なに？」

リンク「これからもよろしく頼むよ、一人で最高のコンビネーション、作り上げようぜ（＝ロッジ）」

スバル「…………、よよよ…………よりじくお願ひ…………しま……す……／＼」

スバルは俺と握手をしているが、顔を赤くして頭を下げている。熱でもあんのかなー。

ティアナ「…………あいつの鈍感は酷いわね…………いつスバルの気持ちに気づくやら……はあ……」

ティアナは深いため息をつき、自分のデバイス、クロスマリージュを見る。

ティアナ（こんな仲間たちだけど、頑張つて行こうね、クロスマリージュ）

クロスマリージュ（貴方の為ならなんなりと）

マッハキャリバー・ブラストキャリバー（今後の二人に期待ですね……）

意外と恋バナが好きなデバイス姉妹だった。

なのは「じゃあ、新しくなつたデバイスで訓練しようか！」

「…………はいっ！！」「…………」

なのは「てことで、フェイトちゃんと私対フォワード陣大規模模擬戦、始めるよ！」

「…………ええっ！？」

なのは「えっ…………何でフェイトちゃんも驚いてるの…………？」

呼び出されていたフェイトは焦りながらなのはに答える。

フェイト「だ……だつて皆は新しいデバイスを会つたばかりだよ…………？」

なのは「ちまちま訓練するより、新しいパートナーと思いつきり戦つてみる方が大きい成果が出る気がするんだつ」

リンク達なのはの言い分に苦笑する。

リンク「良いですね、やりましょ。僕のブラストキャリバーも戦いたくてうずうずしてるみたいですし……皆もやってみたいよな？」

スバル「新しいデバイスと最初っから思いつきりやるのが・・・楽しそうっ！」

ティアナ「どんな子達のかも分かるしね、ね？クロスミラージュ」
クロスミラージュ（私は模擬戦練習に賛成させてもらいます）

ティオ「インフィヒーと一緒に頑張るもんっ！」

インフィヒー「ティハート（一緒に頑張りましょっね）

次々と模擬戦賛成の声が上がっていく。困惑するのはフェイトだけだ。

フェイト「ええっ・・・しようがないなあ・・・じゃあ私も参加するよ。エリオとキャロ、ティオが強くなってるのか見たいし」
なのは「じゃあルールはこうだね。基本的に一対三の戦いで、フェイト対エリオ、キャロ、ティオ。私対リンク、スバル、ティアナって所かな。この間は一発入れれば勝ちってことになつてたけど、今回は本気の勝負！フェイトと私が撃墜されるか、フォワード陣が全滅するかの勝負にするね！！」

リンク「それで行こうか、スバル、ティアナ、よろしくな」
スバル・ティアナ「よろしく（ねつ！）（頼むわよつ！）」

フェイト「私の相手は子供たちかあ・・・よろしくね」

「「「お母さんよろしくーっ！－！」」

フェイト「・・・ちょっとやりすらーいかも・・・」

フェイトはため息交じりの苦笑いをした。

なのは「今回は荒野でやりましょっか、ステージセット・・・つと一瞬にして訓練施設が風が巻き起こる荒野に景色を変える。エリオ達は既に遠くにいるらしく、ここには四人しかいなかつた。

なのは「さて・・・新しいデバイスでの始めての戦いだね。セットアップよろしく！」

リンク「ブラストキャリバー、Setup!..」

ブラストキャリバー（Stand by ready・OK・Setup.）

リンクが紅の光に包まる。

スバル「うわっ・・・眩しい・・・」

ティアナ「何・・・この魔力量・・・」

なのは「リンクはずっと支給されたデバイスを使ってたからね、リンク専用に作られた新しいデバイスだからでこそ、出せるものも出せるようになるんだ。・・・というか、この魔力量・・・並みの魔導士達を軽く超てるね・・・今までの魔力で私のプロテクションを破りかけるんじや、この魔力量なら私の今のプロテクションを破れるかも」

リンク「・・・っと、バリアジャケット装備。・・・なんか凄いデザインだな」

リンクの体には、動きやすい簡略化されたライダースーツの物のほかに、足のかかとに届きそうなくらいの大きなマントが付けられていた。

スバル「・・・かつこいいよ、リンク」

リンク「・・・突然何を言い出すスバル」

ティアナ「へえ・・・ナックルも足回りも凄く良い出来ね」

リンク「重過ぎないナックル、軽量な足回り・・・さすがシャーリーさん、良いものを作ってくれました」

なのは「そういってすると嬉しいな。シャーリーにも喜んでたよつて伝えとくね」

リンク「ありがとうござります」

スバル、ティアナも装備を済ませ、模擬戦開始のスタート位置に付く。

なのは「さて・・・どうまで自分のパートナー達と心を交わせるか、試させてもらひよつ！！Ready.....Start!!!!！」

そして管理局のHース・オブ・エースとフォワード陣三人組の模擬戦の火蓋が、切つて落とされた。

フェイト「・・・なのはたちは始めたみたいだね。私たちもやるよ。バリアジャケットよろしくね」

「「「はいっ！...」「」」

ティオ「インフィニティハートッ！セーヴィット、アーケイプッ！」

ティオの姿が変わっていき、右手に身の丈を超える大きな杖が構築される。

ティオ「インフィ、おつきいねっ」

インフィニティハート（持ちづらいですか？）

ティオ「ううんっ、インフィ軽くて扱いやすいよっ」

インフィニティハート（それは良かつた。シャーリーに軽量化を施しておくように頼んであつたのです）

ティオ「えへへっ、ありがとインフィッ」

エリオ、キャロもバリアジャケットを装備する。

フェイト「さて・・・あまり怪我はして欲しくないから」（つちはちよつと手加減するけど・・・エリオ達は構わず攻撃してきてね）

「「「はいっ！...」」

フェイト「じゃあ・・・どれだけ強くなつたか見せて貰つよ・・・

Ready.....Start!!!!」

そしてフェイト達の模擬戦も、始まつていく

フェイト side

ティオ「キャロッ！－！転移！－－多分結構高いところまで－－」
キャロ「了解です！」

ティオが何処かは分からぬが転移されていく。
フェイト（…何処に転移したんだろうか。まあ大規模なサポート魔法を発動させる為に転移させたとしか思えな…つ！？）

突然にフェイトの身体に重力が重く圧し掛かる。

フェイト「…なにこれ…身体が重い…つ！？」

フェイト side end

エリオ side

エリオ「…ティオさんの魔法が発動したみたいですね」
フェイト「…こんな魔法喰らつたことないんだけど」

ティオがわざわざ全体念話で話す。

ティオ（この間覚えたんだつ。グラビティバインドっていう魔法なんだけどな…本来なら敵を押しつぶしてしまえるんだけどまだまだ出力不足…）

フェイト「ティオならもつと強い魔法が出せるようになるよ」二口ツ
ティオ「…えへへつ。そつか「隙有りつ」…ええつ！？エリオ君危
ないつ」

エリオ「えつ」
とんつ。

エリオの意識はそこで途絶えた。

エリオ side end

キヤロ side

なんかフェイトお母さんが凄い速さでエリオくんに接近して一撃でエリオ君を氣絶させてしまいました…。

キヤロ、絶賛困惑中。

フェイト「うーん…いつもより速度は出ないな…」

キヤロ（あれでグラビティバインドが効いてる状態なの?…? キヤロ!?)

ティオ（うーん…フェイトお母さん、恐るべし…。どうしようか、

キヤロ、私のところに転移できる?）

キヤロ（うんっ。わかつたつ）

フェイト「さて…あとはキヤロ…「作戦タームツ…」めんフェイトお母さんっ…」…べつ」

しゅんっ。

キヤロ side end

フェイト side

キヤロの姿が消える。転移魔法を使つたようだ。『J-1寧に何処に飛んだか分からぬ』ように使つたみたい。

フェイト「中々転移魔法だけはつまじやない…何処に行つたのかしら…」

そんな風に考えていると体の重みが消えた。

フェイト「…グラビティバインドは解除されたみたいだね。援護組

二人で何処までできるのか…見させて貰…」

そんな時だった。

シュー…

フェイト（…何か飛んできる?）

フェイトは振り向いて後ろを見る。

フェイトの身長を優に超える球体のシユーターが迫ってきていた。

フェイト「なにあれっ！？」

フェイトは回避行動を開始する。が思念誘導されているのか避けても避けても追いかけてくる。

フェイト（…バルディッシュュ。プロテクションを）
バルディッシュュ「Y e s s i r .」

フェイトの腕にミッドチルダ式の円形防御壁が出現する。そのプロテクションに巨大なシユーターがぶち当たる。

フェイト「なんていう威力…」

フェイトはプロテクションで防御しながら、バルディッシュュを使ってシユーターの威力を物理的に削っていく。

そして、なのはの使うシユーター並みに小さくなったシユーターをみて、フェイトは止めを刺そとバルディッシュュを大きく振り上げて…振り下ろした。

シユーターは真っ二つにわれ、降下を始めた。

フェイト「ティオも中々に強い魔法をもつて…」

その時だった。

ぴしつ。

真っ二つに割れて降下を始めていたシユーターに、鱗が入り中から激しい光があふれ出す。

フェイト（…！？まさか…爆発！？）

フェイトのプロテクションが発動させるにはあまりにも短い時間だった。

シユーターの鱗は広がり中から光の本流が溢れ、そして。

爆散。

防御無しにまともになのはのディバインバスター並みの攻撃を喰らつたフェイトは軽々と吹っ飛んだ。

フェイト（いつたあ～つ…あそこまで削つてあの威力…周りは只の拡散した魔力だつたつてこと…？）

フェイト「とにかく…あんな攻撃また喰らうわけには…」

フェイトが立ち上がる、そんな時だつた。

びーびーびー。

フェイト「…緊急通信つー？ティオ！キャラローー旦[模擬戦中止！戻つてきなさいつー！エリオも起きてつーー！」

新たな任務を告げる通信だつた。

なのは side

なのは（この間の模擬戦ではギリギリ負けたけど、今回は負けないよう頑張ろうね、レイジングハート）

レイジングハート（マスターとなら出来ます。ところで、リンク達の新デバイスですが、力は未知数です、注意しましょう）

なのは（ありがと、レイジングハート、じゃあ、始めよっかつ！…）

なのは side end

リンク side

リンク「ティアナ！援護射撃を頼む…」「分かったわ…！」スバル！俺と突撃！！「了解…」「…さて、よろしく頼むぞ！ブラストキヤリバー！！」「all right!!」…ナンバー002、フォームーション『？！』、行くぞ、スバル！！

スバル「ウイングロードは？」

リンク「俺も出せるようになつた！行くぞ！」

スバル「了解！いくよ～つ！」

ドンッ！！

以前の模擬戦で使つたような、縦のウイングロードではなく、左右

両方からスバルの水色のウイングロード、リンクの明るい紅色のウイングロードがなのはに向かって伸びていく。

スバル・リンク おおおおおおおつ！！」

爆発的な加速、以前の速度を大幅に凌駕していた。一瞬にしてなのはのそばに到達する。

スバル・リンクでえええい！」

スバルとリンクは真正面からのはに殴りかかる

なのは「レイジングバー」と、アロマテラシィン！」

北同の國の御内閣の事務は、その本部に於ける事務の外、

なのは「・・・っ！以前より強い！レイジングハート！受け流すよ

!

レーディング・スコア - Accurate Shooter

ルノーラーが選ばれた。

卷之三

なのは「ボディががら空きだよ」

なのはが二人の身体に砲撃を打ち込むとする。

ティアナ「させないわっ！！」

ティアナのケロスミミージュが火を噴きなのは牽制、双方距離を

新編 五十年史全集

なのは「デイバイン」バスター——つ——！」

ありえないほどの詠唱速度で大規模な砲撃魔法を放つ

ラジカルポリマーの構造と性質

ブラストキヤリバー「all right.」

リンクが壁に当たる位置を地面を引いて、ヤングロー工を

リンクの出したウイングロードは地面をのたうち、波型の多重壁を

完成させる。

ウイングロードの先端になののはディバインバスターがぶち当たる。ウイングロードはばねの力を利用し、上手く横へディバインバスターを受け流した。

なのは・スバル・ティアナ「…あんな使い方があつたなんて聴いてない（よ！）（わ！）」

リンク「飛行機並みに早い人間が走るんだぜ？そのくらいの強度があるつて事だろ…」

スバル「私もやりたい！」

リンク「後で教えてやる。模擬戦を続けるぞ…！次…スバル！俺はお前に合わせる！」

スバル「了解！ウイングロード…！」

スバルの足元から新たなウイングロードが現れる。なのはまでのきよりは約150メートル。一直線にウイングロードが伸び始める。爆音を立てながらスバルはなのはに向かつて突撃する、残り130メートル。

なのは「レイジングハート…！お願い…！」

レイジングハート「a11 rington t .」

なのは「アクセル…シユーット…！」

なのはから約50発のアクセルシユーターが打ち出される。残り100メートル。

スバル「…つ！ティアナ！よろしく！」

ティアナ「りょーかい！」

ティアナのクロスミラージュから雨の様に弾丸が打ち出され、大半のアクセルシユーターが打ち落とされるが、残りいくつかのシユーターがスバルに迫る。残り50メートル。

スバル「くつ…」

スバルは回避のために失速しようとすると。

リンク「避けなくて良い！俺がやる…つおおつ…！」

ウイングロードで後から追いついてきたリンクがスバルの眼前に迫

つていたシューターをパンチで根こそぎ打ち落とし、並走する。残り30メートル。

リンク「行くぞ！スバル」

スバル「うんっ！」

なのはに弾丸の様に突撃する一人。異変が起きたのはその時だ。たゞ、マッハキャリバー「State-of-emergency age narration」（緊急事態発生）

スバル「つ！？何！？」

マツハキャリバーが警告を発すると共に、マツハキャリバーの駆動が止まり、スバルのウイングロードが突如消えてしまう。

荒野の地面は硬いゆえに、空中200メートルほどから生身で落ちたらひとたまりも無い。

リンク・なのは・ティアナ「スバルツ！！」

リンクは最小限の旋回で手をスバルに向かつて伸ばす。

リンク（… だめだつ… 一匁かねえつ… かくなるつアカ… 一…）

なのは「……？リンク！！何する気なの！！止まつて……」

てもだ！！

ティアナ「リンクス！」

リンクがウイングロードを便に急降下を始める。ウイングロードが行き着く元は地獄。

行き着く先は……地面。

スバルが地面に叩きつけられる直前にリンクは高速でスバルの下に

回つてゐる。そして。

ズドンッ！！！（ビキビキッ）

スバルはリンクによつて受け止められたが、リンクは物凄い勢いで

地面に吊りつけられた。

なのは・ティアナ「リンクスーー！」

リンク「・・・・・」

なのは「氣を失つてゐ！－－ティアナ！－－急いで救護班を！－－つて何！－？こんな時に通信…つ－？緊急通信！－？」

リンク side end

? ? ? side

? ? ? 「ああ…－－物語の始まりだよ－－あつはつは－－」

」ついで、ファーストアラートは鳴り響く。

リンクさんが怪我しちゃいました。
リンクさんが怪我しちゃいました。

主人公補正で2回言いました。

主人公が怪我して氣を失うつてどうよ?大丈夫、ぴんぴんしてくるから。

次の話はファーストアラート編。前編と後編に分かれる長編になります。

オリジナルキャラクターの大まかなデバイス紹介です。
仕様はどんどん変更していきます（え

なのはS+SS再構成SS「COMBINATION ATTACK!!」 1章

シリンドーナックル&・ブラストキャリバー

リンク用に調整されたナックル型インテリジェントデバイス。同時に製作されたスバルのリボルバー・ナックル改良型&・マツハキャリバーとは姉妹機に当たる。本作ではデバイスの繋がりが強いとコンビネーションが上手くなると強引に設定

ベルカ式カートリッジシステム搭載。

魔力光は明るめの紅。リンクが名づけた『ブラスト』の名はここから来ている。

主に使用可能な魔法

ウイングロード

スバルと同じ、しかしスバルのは水色の道に対し、こちらは紅色の道を形成する。色に違いがあるだけで、能力等はスバルのと大差はない。

ジエットパンツァー

スバルのナックルダスターと同系統に当たる。

威力はスバルのそれを優に超えている、使用者がリンクという力のある男性だからか。

シリンドーナックルにはヴィータのグラーフアイゼンのようにジエット機能が付いており、カートリッジを使用することで威力が数倍にも膨れ上がる。しかし使用者のリンクの魔力はヴィータほど多くないため、シリンドーナックル側で魔力の維持等を行っている。

シリンドーショット

拳の前に魔力弾を形成し、殴つて相手に飛ばす直線砲撃魔法。殴る強さによつて飛んでいく速度が違う。

後にこの技がリンクの必殺技の原案になつていく。

インフィニティハート

ティオールが持つことになつたインテリジェントデバイス。人格はお姉さんタイプ。

モデルはなのはのレイジングハート。レイジングハートより砲撃能力に劣り、思念制御や援護魔法を駆使する能力に勝る。

ミッドチルダ式のティオールのデバイスだが、リミッター付きのベルカ式カートリッジシステムが付いている。いざという時は親に当たるフェイトなどの使用許可が出る。

主に使える魔法

コントロールシューター

なのはのシューターは数多くを制御して相手を翻弄するが、ティオールのシューターは身の丈を優に超える巨大なシューターを単発で出し、相手を遠距離から追い詰めるタイプだ。

そのシューターが爆散した時の威力は申し分なく、なのはのデイバインバスター並みの威力に当たる。

ロングサーチ

かなりの広域をサーチ出来る魔法、しかし使用中は動けない。

パワークース

広域克強力な結界を張ることが出来る。なのはのアクセルシューターでは太刀打ちできないほどの強度を誇る。これも、使用している間は動けない。

ファーストアラートが鳴り響く。

なのはStS再構成SS「COMBINATION ATTACK!!」2章

ファーストアラート編前編です。

リンクが居ない中、5人のフォワード陣が暴走列車に乗り込みます。

今回はライトニング部隊が主なスポットです。

あと頼れる兄貴なお話。

問題の現場に向かう機動隊へりの中で、スバルは俯いて自分を痛めつけていた。

スバル（のせいだ、わたしのせいだ、私のせいだ！）

なのは「スバル」貴方のせいじやないわ、

スバル「でもっ !! そのせいでもソウがつ
の魔方に対応できなかつたつていい」

ティアナ「あいつはスバルを守るために行動したのよ？貴方がそんなにどうするの？」

タ一)

スバル「わかんないよ…なんでリンクが怪我しなきやいけないのよ…なんでリンクが怪我するだけでこんなに胸が苦しいの…？」

なのはとティアナ、マッハキャリバーはスバルがどんな気持ちなの

が、分かったような気がした。

だから、リンクは愛する人を傷つけたくないが故にスバルを怪我してでも救い、スバルはスバルで、愛する人が傷ついてしまったことが物凄く痛いのである。

皆が空気を重くしていた時、あるものが口を開いた。

（さんむ）
ブラストキャリバー（スバルは悪くありません。それに、マツハ姉

スバル「えつ……？」

プラスティカリバー（マイマスターは、実は怪我をしないでも済んだのです、スバルを地上スレスレでキャッチして、再びウイングロードで舞い上がることも出来たはずでした。ですが、マスターはそれをしなかつた。それが何でか分かりますか？スバル）

スバル「……どうして……？」

プラスティカリバー（貴方の身体に負担をかけない為です、スバル。貴方はあの時生身の人間でした。もしあの角度で急旋回していたら、風圧や気圧で貴方の節々の骨が折れかねません、マスターは、それを考慮してわざと地面にぶつかったのです、勿論、貴方をかばいながら）

この事実には誰もが驚いた。自分が怪我をしなくて済む道があつたのにそれを捨ててまでもスバルに怪我をさせない為に動いたのだ。

プラスティカリバー（そして、マイマスターは氣を失う寸前、声には出せなかつたものの、私に一つメッセージを残しました。スバル、貴方に『気にするな』と言つておけとの事ですよ？それでもまだよくよしていられますか？スバル？）

スバル「リンク……私は……」

操縦士「高町教導官！！問題の列車が見えました！！」

ヘリの先にはありえない速度で走る列車が見えてきた。

なのは「あの中にレリックがあるわ！！今回の任務はその回収！

！そして、敵対勢力、ガジエットドローンの殲滅！！……あれはっ！

？」

操縦士「このヘリに多数の飛行型ガジェット接近中！！迎撃準備を！！！」

フェイント「OK！！なのはと私で迎撃するよー！フオワード陣は後で列車に直接乗り込み、レリック回収及び地上型ガジェットの殲滅！！OK！？」

「「「「はいっ……」」」

一人足りないフォワード陣が、元気良く返事をする。

なのは「まずは列車の上にいるガジェットを殲滅！その後に列車内に乗り込んでレリックを回収するよ……行くよ……」フェイトちゃん！…」

フェイト「うんっ……」

二人はすばやく変身し、ベリから飛び降りていく。空戦魔導士であるからこそ、飛行型ガジェットの迎撃には向いているのだ。

ベリの中には、フォワード陣が取り残された。

エリオ「…キヤロ、緊張しているの？」

キヤロ「…うん」

エリオ「一緒に頑張りつ？きつと上手くいくから」

キヤロ「でも…怖いの…」

ティオ「もーっ！…なんでそんな暗いのつ！…スバッヒドカーンとやつちやいましょうよ……ね……エリオ、キヤロ……」

エリオ「…そうだね……」

キヤロ「…うん！…いつもどおりにやればいいんだつ…怖くなんてな

いよ……ありがと…ティオ…」

ティオ「やつとやる氣出してくれた？一緒にがんばりつ…」

「「うんっ…！」」

ティアナ「…スバル。行ける？」

スバル「…うん」

ティアナ「リンクは死んだわけじゃないわ。まずこの任務をやつさと終わらせて、リンクの看病すべきじゃない？」

スバル「…そうだよね。早くリンクに逢いたい」

ティアナ「じゃあやつと終わらせましょ！行くわよ…」

「「おうっ…！」」

二人の拳が重なる。

操縦士「まもなく列車の上に到着します！！フォワード陣、準備を

11

卷之二

ティアナ・彗星を!!」

卷之三

フォワード陣はヘリから飛び降りる。ヘリに残されたのは待機状態のブラストキャリバー。

「ブレストキヤリバー（頑張ってくださいね、5人とも）」
その時、ブレストキヤリバーに通信が入った。

リンク（緊急任務中か？）

（気がつきましたか、マスター。今日は5人で何とかするみたいですから、ゆっくりと休養を…（断る）…つな！？マスター！？）

（傍は現場は行くせ）（バス停ギャリバー）

黒澤はあるものではありますまい!!

リンク（わりーな、ブ拉斯トキャリバ

きてねえんだ

アーティストキャラバン（…アーティストですか？マスター）

は見てらんねー。てことで頼むよ。ブラストキャリバー）

ブラストキャリバー（… まつたく。そろそろ自分の気持ちに気づい

リノワ、モネ、セザンヌ、ピカソ、

ブラストキャリバー（ダメでも）

「アスリギヤリバー（…ダメですね）れー…まあ、分かりました。操縦士やなのはさんには、こちから話を付けておきましょう」

リンク（悪いな、ブラストキャリバー。わがままにつき合わせちまつて）

ブラストキャリバー（いやな予感がするのは私も一緒ですよ。マスター）

リンク（…ははっ）

ブラストキャリバー（…ふふっ）

リンク（お、笑うなんて珍しいじゃないか、デバイスなのに）

ブラストキャリバー（進化してるんでしそうね、貴方に持たれてから）

（ら）

リンク（これからも頼むぜ、ブラスト）

ブラストキャリバー（ええ、私からも頼みましょう。頼みます、姉とスバルを）

リンク（じゃあ向かうとしますか。テレポートは使えるか？）

ブラストキャリバー（座標はもう設定してあります。あとはマスターの魔力で扉を開くだけです）

リンク（了解。よし、行くぞ）

ヘリ内にテレポートが開かれ、中からリンクが飛び出す。

ブラストキャリバー（…ぼろぼろじゃないですか）

ブラストキャリバーの言つとおり、リンクの身体の所々には、何十にも巻かれた包帯が見えた。

リンク「骨が折れなかつたのが不思議なくらいだな。ちょっと痛むが平気だ」

操縦士「…えつ！？リンク殿！？」

リンク「わりーな。来ちまつた。なのはさんには通信つなげられるか？」

操縦士「…了解しました。高町教導官。リンクが通信所望です、」

なのは（…えつ？リンク！？なんで此処に！？休んでないとダメじゃない！…）

リンク「すみませんがなのはさん。俺もこの作戦に参加させていただきます」

なのは（でも…っ！身体はまだ…！）

リンク「骨は折れてないので平氣です。…それより、いやな予感がするんです。頼みます、なのはさん。俺に出させてください！」

なのは（…無理は禁物だよ、リンク。あまり本氣出さないこと。あと帰つたら無断で病院を抜け出したことについて反省文30枚ね）リンク「…了解です。有難う御座います。なのはさん

なのは（…早くスバルのところに行つてあげて。スバルとティアナを頼んだよ！…）

リンク「言われるまでもなく…行くぞ…！」
「…」

ブラストキャリバー「all right my master .

そしてリンクも、戦場へを降り立つていく。

ティアナ「エリオとキヤロとティオは外からガジェットを殲滅！スバル！私たちは内部に入つて殲滅とレリックの回収をするわよ…！」
エリオ・キヤロ・ティオール「「「はいっ！…」」

スバル「りょーかい！ティア！」

スバルが天井部分に穴を空け、ティアナとスバルが内部へと侵入していく。

エリオ「この穴を基点にガジェットを中に入らせないように動こう！…穴から離れた所に外のガジェットをテレポート…できる！？キ

ヤロ！」

キヤロ「分かつた！」

様子見をしていたガジェットの下に魔方陣を引くが、

キヤロ「…つ！？飛ばせない…！？」

そこでのなのはの通信が入る。

なのは『ガジェットにはAMFが標準装備させられているよ…！並

大抵な魔法は全部効かないジャマーシールド……』

ティオール「ええつ！じゃあどうすれば良いのつー？」

なのは『エリオの槍で直接攻撃するか、よっぽど一矢を強力にした

砲撃じやないと……』

その時だった。

インフィニティハート『Sonic Shot』

ティオール「撃ち抜けつ！！」

極限まで範囲が狭められた高速弾が、ガジェットのAMFを貫き通し、本体に突き刺さる。

致命傷だつたのかガジェットは煙を出し駆動を沈黙させた。

ティオール「ふい～…なのはさんの意つとおりだねつ」

なのは『…いつの間にそんな魔法を…？』

ティオール「フェイトママにね、近距離でも使える射撃魔法を教えてもらつたの！形はそのままフェイトママのフォトンランサーだけどね…』

なのは『それにしてもガジェットのAMFを一撃で打ち抜くなんて…』

ティオール「あ、弾頭は只の空気だよ～改良して、魔法で圧縮された空気を押し出してるだけなの」

なのは『そつか…周りに纏ついていた魔法はAMFに阻まれたけど圧縮空気だけは本体に突き刺さつたのね』

ティオール「そ、だからソニックショットって言つ名前なんだ！良い名前でしょ！』

なのは『うん。良い名前だね』

ティオール「えへへー」

エリオ「そんな暢気に話してゐる場合ぢやないですよー。さつきの一撃でAIが変わつたみたいですよ！」

気がつくと3人が守る穴の周りを囲むようにガジェットが迫つていた。

ティオール「わわわ…グラビティバインドは…』

エリオ「AMFに阻まれて効かないと思うよ。ティオのソーックシヨットもそう何度も連續では撃てないし……」

キヤロ「エリオくん…どうしよう…」

エリオ「キヤロ、身体強化魔法を頼めるかな？僕が近くの敵を何とか弾くから、ティオは僕の死角に来たガジェットをお願い」

キヤロ「分かったよ。『我が乞うは、疾風の翼。若き槍騎士に、駆け抜ける力を』」

ケリュケイオン『Boost Up Acceleration』
エリオの身体に力が漲る。

キヤロ「機動力を上げる支援魔法。エリオくん。頑張ってね」

エリオ「有難うキヤロ！頑張るよ！」

キヤロ「…そうだ。ティオにも一つ魔法をかけるよ。『我が乞うは、幾多を貫く力。若き杖魔女に、撃ち抜ける力を』」

ケリュケイオン『Boost Up Barrret Power』
インフィニティハート『マスター。射撃魔法の威力が上がったようです』

ティオール「本当っ！？キヤロ！凄いね！」

キヤロ「効果が切れたら言つてね。またかけ直すから」

エリオ・ティオール「うんっ！」

ティオール「じゃあ私も頑張っちゃおう！インフィー・パワープロテクションタイプ！」

インフィニティハート『Power protection In
stalled type』

並んでいたティオールとキヤロが球体型の防御壁に囲まれる。

キヤロ「…これは？」

ティオール「強度強化型の設置プロテクションだよ…多分相手の攻撃は防ぎきれると思う！私は基本的な射撃しか使えないから、キヤロと一緒に援護だよ！」

キヤロ「うん。でも何か、ここにいると力が沸いてくるような…」

ティオール「地味に魔力回復の効果があつたりするよ。ほんの微量

だから、キヤロの支援魔法が1回補えるか位だけ』

キヤロ「十分だよ！一人で頑張ろう！エリオくん！頑張つて！」

エリオ「うん！行くよストラーダ！」

ストラーダ『a l l l i g h t m y m a s t e r』

沈黙していたガジェット達が、火蓋を切られたかのように砲撃を開始する。

たちまちティオールとキヤロには、エリオの姿が見えなくなつた。

ティオール「うわわつ…案外強いかも…」

キヤロ「エリオくんはつ…？大丈夫なの…？」

エリオ『大丈夫だよ』

エリオの念話が届き、そして。

ストラーダ『S o n i c M o v e』

爆発的な加速が一縷の軌跡を編み出した。

エリオ（キヤロの魔法で支援されているからか、いつもより早く動ける！）

ストラーダ『油断は禁物ですマスター。一機ずつ潰していくましょう』

エリオ（うん！頼むよストラーダ！）

エリオ「てええええいつ…！」

数多の弾幕を交わし、身近にいたガジェットに迫る。

AMFに多少阻まれながらも、その本体に槍を打ち込み、本体が地面に落ちる前にすぐに違うガジェットへと襲い掛かる。

その後も一機、三機と次々と倒していくが、如何せん数が多い。いまだエリオの前には数多くのガジェットが立ち塞がる。効果が切れたのか、機動力も元に戻つた。

キヤロ「エリオくん！これを！」

先ほどかけてもらつた機動力増加魔法に加え、二つの魔法がエリオにかかる。

ケリュケイオン『Enchant Field Invade&a

m p · B o o s t U p S t r i k e P o w e r『

エリオ「これは…？」

キヤロ「AMFの効果を乗り越える魔法と、打撃力を上げる魔法…つてエリオくん危ない！」

エリオ「つ…？」

いつの間にか後ろから迫っていたガジェットが「コードを強く撓らせエリオに襲い掛かる。

エリオ「避けきれない…！！」

エリオはプロテクションを発動させようとすると、ガジェットは既に攻撃態勢に入っていた。

インフィニティーハート『Sonic Shot』

ティオール「残念でしたっ！」

エリオに襲い掛かろうとしていたガジェットがティオールの射撃魔法によつて吹き飛ばされる。

エリオ「ティオ！ ありがとう！」

ティオール「ちやつちやとやつつけちやつてよー早くお家帰つて美味しいご飯食べたい！」

エリオ「ははっ、分かつたよ！ 行くよストラーダ！」

ストラーダ「待つてくださいマスター！ 何か巨大なものが来ます！」

エリオ「…？」

味方であるはずのガジェットを何体か吹き飛ばし着地したのは、今までのガジェットの3倍はあるつかという大きさのガジェットだった。

エリオ「…なに…あれ…」

エリオの顔が驚愕に歪む。

ティオール「おつきいねー」

ティオールは素直に感心する。

キヤロ「いやいや！ そんな悠長な」と言つてられませんよ…！」

キヤロは驚きと驚愕ついでにティオールに突っ込んだ。

3人の前には大きな球体のガジェットが立ちはだかった。
その大きさ、ゆうに五メートルは越しているだろう。
そんな大きな機体と、身長が140にも満たない少年少女が3人立
ち向かっている。

沈黙を破ったのはガジェットの方だった。

『

人間の耳には聞こえなさそうな機械音を鳴らしながら、ティオール
とキヤロを守っていたプロテクションにコードを殴りつける。
メキメキメキイツ…

ティオール「くううっ！防ぎきれないっ！！」

二人を守っていたプロテクションに輝が入り始める、プロテクショ
ンが破れる前に動いたのはエリオだった。

エリオ「…っ！！ストラーダ！！」

ストラーダ『Sonic Move』

加速したエリオとストラーダがティオール達を襲っていたコードを
弾き飛ばす。

エリオ「ティオとキヤロには手を出させてたまるかっ！！」

エリオは立て続けにガジェットに攻撃を刻み込む。しかし、AMF
が強力なのが有効な一打が生み出せない。

エリオ「はあっ…はあっ…」

ストラーダ『master!!』

エリオ「つ！！」

疲労し動きを止めたエリオにガジェットのコードが襲い掛かる。エ
リオは遅いながら、コードを回避していく。

キヤロ「だめ…っ！この距離じゃ支援魔法が届かない！！」

エリオは二人の被弾を防ぐためか、幾分か離れて戦つていた。
ティオール「こっちはこっちで忙しいし…っ！！」

ガジェットは一機だけではない。AIがそう判断したのか、巨大な

ガジェットだけがエリオに攻撃し、その他のガジェットがティオール達に襲い掛かり、上手く身動きが取れない。

エリオ「くっ…ダメだつ…倒せない…！」

二つは一旦描きし三つが力消え、口がそれを持てればかない。

エリオー しまー..! ぐー^ト 気づかぬ間に後ろから忍び

卷之二

エリオ「うわあああああああああつーー」

メキメキメキトイッ！

本作が「アーティスト」の力に寄り切る形となってしまった

ティオール「数が多くて助けにいけない！！エリオーツ！！」

その時だつた。

№^о

井口元才川一志

キャラ達が困惑した一瞬のうちに、既にウイングロードに乗つて突撃していく、マントを纏つた一人の戦士の姿が一人の目に映つた。

リンク「人のつ、弟につ、何してくれとんじやあ―――つ―――！」

ブ^ラス^トキ^ヤリ^バー『J^{et} P^{an}t^zer!』

現れた青年が、強力なAMFを物ともせず、拳一発でガジェットを吹っ飛ばした。腕に気を失いかけたエリオを抱えた、リンクの姿が、そこについた。

ティオール「りんにいつ……！」

キヤロ「リンクさん…っ…？」

エリオ「…リンクさんが…？」

リンク「大丈夫か？ 皆…いたたたたたつ…！」

プラストキャリバー『無理しすぎですマスター！ あんな加速をするなんて！』

リンク「いやあ…エリオが捕まってるの見たらついカツとなっちゃつて…」

プラストキャリバー『自分の身体をもつと大事にしてくださいよつ…』

リンク「すまない… 今後気をつける」

プラストキャリバー『もう効かないっていうのは分かつてんんですけどね… スバルのときもそうでしたし… もう知りませんっ』

リンク「怒るなよプラスト…」

プラストキャリバー『…そんな一面をスバルに見せてやればイチ口なのに…』

リンク「ん？ 何か言つたかプラスト？」

プラストキャリバー『何も言つてしません…！』

ティオール「りんにいつ！ 病院抜け出して来ちゃつたの…？ ダメだよ寝てなきや…！」

キヤロ・エリオ「…そうですよリンクさん…！」

リンク「…つたく…いつまで他人行儀なつもりだお一人さん？」

キヤロとエリオの頭にぽんと手を置きグシャグシャと撫でる。

リンク「フェイトさんが言つてただろ？ フォワード陣は家族のよつな物だつて。家族が傷ついてる… しかも弟、妹が頑張つてゐるのに兄が寝てるわけにいかないだろ？」

エリオ「…そうですが…リンクさ…」

リンク「今度から俺のこと兄さんと呼べっ…！」

キヤロ「ええっ！ いきなりなんですか…！」

リンク「他人行儀だからいけないんだ！ 言つただろ…家族つて！ 家族ならいつでも助けてやるよ！ ほら！ こんな風にな…」

キャラ達の後ろから襲い掛かってきたガジェットをリンクが一撃で吹っ飛ばす。

リンク「…聞いてくれ」

エリオ・キャラ「…はい」

リンク「困ったならいつでも助けてやる、遠慮なんてすることはない。俺が怪我してようがなんだろうが、必ずお前たちを助けてやるよ。分かったな？」

リンクの笑顔には何となく喜びが沸いているような気がした。

キャラ・エリオ「…はいっ！兄さん！」

兄さんと呼んだ二人の顔も喜びに包まれる。

リンク「ティオも困つたら何でも言うんだぞ？」

ティオール「りんにい…最近あれが来ないの…」

リンク「ぶはっ！？そういう悩みはなはさんかフェイタママに聞きなさいっ！？」

ティオール「うつそだよ～んつりんにい、これからもよろしくねっ

」

ティオールは小悪魔みたいなウインクをした。

リンク「…つと、じうつかうかしてらんねえ…弟達よ、此処を頼めるか？」

リンクの目線の先には、先ほど吹き飛ばされた時にかなりのダメージを負つたのか、動きが鈍つた巨大ガジェットがいた。

エリオ「任せてください、必ず倒します。兄さんは中へ？」

リンク「ああ、なんかいやな予感がしてな」

キャラ「あ…ちょっと待つてください兄さん。ケリュケイオン、ヒールを」

ケリュケイオン『OK・Physical Heal』

リンクが光に包まれる。

リンク「お…痛みが引いた」

キャラ「一時的な治療魔法です。後これを」

ケリュケイオン『Boost Up Acceleration &

amp; Enchant Field Invade & Boost Up Strike Power』

リンクに三つの補助魔法がかけられた。

キヤロ「機動力向上とAMFを無効化、打撃力向上の魔法です」

リンク「おあ…ありがとなキヤロ」

キヤロ「どういたしまして、兄さん」

リンク「さて…そろそろ行くか。ティオ、一人のこと頼んだぜ」

ティオール「りんにいが頼んだことなら何でもやつてみせるよ…！」

絶対勝つね…！」

リンク「その意気だ。頑張れ！三人とも…！」

キヤロ・エリオ・ティオール「うんっ…！」

先ほどまでより身体が軽くなつたリンクは、大急ぎで内部へと侵入していくのであつた。

ストラーダ『…リンクは行つたようですね』

エリオ「そうだね、ちょっと無茶しちゃうことになるけど大丈夫？」

ストラーダ『

ストラーダ『マスターのためなら幾らでも早く動きます』

エリオ「…ありがと、ストラーダ」

ストラーダ『Purge』

バシュツ…

エリオの装甲とストラーダの装甲の一部が吹き飛ばされる。

キヤロ「…エリオくん…本気なんだね…！ティオ…一人で道を切り開くよ！」

ティオール「りよーかいつ…！インフィー！行くよおつ…！」

インフィニティハート『Sonic shot Phalanx

Shift』

ティオールの周りに十数機ほどのスフィアが発生し、速いとまではいかないが確実に一機ずつ殲滅していく。

ティオール「くうう…っ…！」

ティオールは懸命に魔力を供給しながら打ち崩していく。

キヤロ「ティオが頑張ってるんだ！私も負けられないよ…！」

フリード「きゅくゅ～？」

空気の読めないフリードがキヤロの帽子から飛び出した。

存在を忘れていたキヤロは慌てふためきフリードに飛び掛る。

キヤロ「うわわっ…フリード！出できちゃダメーっ…！」

ティオール「キヤロ！危なー！」

キヤロ「え？」

いつの間にか防御壁から出でしまったらしい。ガジェットのコードが間近に迫る。

フリード「あゅ～ぬ～ーっ…！」

ぼわっ！

フリードの吐き出した火球がコードを焼き飛ばす。

キヤロ「う…フリード…ありがと…フリードは戦いたくて出できたの？」

フリード「きゅくゅ～っ！」

キヤロ「そつなの…じゃあ、一緒に頑張りつー！」

フリード「あゅ～ぬ～っ！」

次第にティオールとキヤロによつてエリオには突破口が見えてきた。

エリオ『ストラーダ…行くよー!』

ストラーダ『OK・my master』

一瞬の内に数多くのガジェットがいる中、たつた一本の突破口をつけ出した。

エリオ「 今だつ！…」

ストラーダ『Sonic Move!…』

ズドンッ！

装甲が減少した分軽量になつたエリオとストラーダは、田に見えな
さそうな速度で巨大ガジェットに突撃した。

巨大ガジェットも見抜けなかつたようだ。

既にその身体には一本の槍が突き刺さつていた。

大きく身体を震わせ、駆動を停止する巨大ガジェット。

誰もが息を吐きかけた時、再び駆動が始まった。

エリオ「 なつ！急所を貫いたのに！」

ストラーダ『おそらく 自爆かと！マスター！早く安全圏に

』

時既に遅し。巨大ガジェットは強力な光で身を包み、轟音を発しながら爆散した。

エリオ「 つうあつ！！！」

声にならない叫びを上げ、大きく吹つ飛ばされたエリオは 暴走するリニアレールの外側へと弾き飛ばされてしまつ。下にあるのは地面が見えない谷だ。

キヤロ「 エリオくん！！」

キヤロが反射的に無謀にもエリオの後を追つて谷底へ飛び込んだ。

ティオール「ええつ！！ちよちよちよ…！あんた達飛べないでしょ

うがあーつ！！」

ティオールも覚えたての飛行魔法でフラフラ飛びながら谷底へと飛び込む。

後ほど、飛べない二人を一生懸命持ち上げようとしているひよっこ空戦魔導士が武装へりで保護されたそうだ。

ちなみに敵の自滅とはいえ、リニアレール外側にいたガジェットは戦闘と味方の自爆により全滅。かくいうビギナーズラックというものだつた。

なのは・フヨイト「 あんな無茶しちゃダメでしょーー！」

まあ、ヘリの中でなのは達の怒りの鉄槌を喰らつたわけだが。

リンク復活です。早いよ！！

主人公補正で治りが早いんです。多分。

後半は列車内へ入り込んだスターズ部隊のお話です。

後編が終わったらリンクとスバルの惚氣話を挟みたいと思います。

あ、コメントに好きなカツプリング書いてくだされば多分R 15
指定で短編書きます。クロノ×なのはだと主テンションUP。
ちゃつちやと後編書きたいところですが。あいにく主は何かと忙し
いので完全版のUPは12月大晦日前辺りになりそうです。
正月特別SS？書くかもね。

そういうばあと1週間でなのはのゲーム発売だよ！！

以前のゲームのガチキャラのヴィータちゃんが強くなつていいこと
を期待。

だがクールタイム殆ど無しで砲撃放てるリンフォース、お前はダメだ（え

うそです、どのキャラも愛を持つて接しています。

リンフォースを使う主のリア友にはなのはのディバインバスター
で返り討ちにしますが。

以前のゲームは相手の動きを読んで魔法を当てるという感じでしたが
が、今回はコンボが組み合わさっているみたいですね。
より格闘ゲームらしくなつて良いと思います。主に遠距離攻撃主体
の格闘ゲームですが。

＼それ格闘ゲームじゃないじゃん！！／

続きます。

なのはなたS再構成SS「COMBINATION ATTACK!!」特別章

リンク「…おい、原作の時間軸からかなりずれ込んでるぞ」

スバル「しーつ、それは言つちや駄目だつて…！」

ティアナ「主が今年も一人で寂しいからお前たちと遊ぶ…だつてさ」

リンク「誰か相手してやれよあのクソ主…」

スバル「リンク…書いてくれる人にそれはないかと…」

ティアナ「良いんじやない？主はスバルとリンクをいつや いつわせるSSを書きたいみたいよ？」

リンク「自分に彼女が居ないから脳内でお花畠作ろうとしたてるのか
主は」

ティアナ「寂しい主なんだから、それくらい付き合つてあげたら？」

（同情の目）

リンク「しょーがねえなあ…」

スバル「リンクちや ひ…ふふふ…えへへ…」

リンク「…やけに今日のミッドチルダは騒がしいな」

スバル「リン、忘れてる?今日はクリスマスイブだよ?」

ティアナ「年頃の男子がクリスマスイブを忘れるとは…」

リンク「…クリスマスイブってなんだ?」

スバル・ティアナ「…え?」

事の発端はこうだった。

なのは「クリスマスイブっていうのはね、家族やお友達、こ…恋人とかと楽しく過ごす日なんだよ。で、明日がクリスマスっていうて、今日の夜、サンタさんが配つてくれたプレゼントを開けて喜んだり、メリーカリスマスマス!つてお友達とかに言つて回る日なの」

午前任務を終え、ミッドチルダから昼食をとる為に時空管理局に戻つたリンク達は、食堂で偶然会つたのはに今日の事を聞いた。

なのは「まあ、私の地元、地球にあるアメリカっていう国は、お友達とかじやなくて家族で過ごすって事になつてるんだけどね…私が住んでた日本つて国ではお友達と云々つて話に捻じ曲がっちゃつてるんだけど…」

リンク「…サンタって誰だ?」

スバル「夜、皆が寝てる間に家の中に入つて、プレゼントを置いてつてくれる人だよ」

リンク「それにしては、ミッドチルダでは子供がリボンの付いた箱を持つて大喜びしていたが…」

なのは「うーん…言っちゃ悪いかも知れないけど、サンタさんはホントは居なくて、お母さんお父さんがプレゼントを子供に買ってあげるんだよ…」

リンク「なるほど…サンタはクリスマスという物語の架空人物にし

か過ぎないっていう事ですね」

ティアナ「リンクにしては理解が良いじゃない、まあ、家族や友達とどんなちゃんと騒ぎする日と思つてもうつて相違ないわね」

リンク「へえ…知らなかつたな。なのはさんやスバルは今夜パーティー的なことをするのか？」

なのは「私はフェイトちゃんの家族と家族ぐるみのお友達だから皆でフェイトちゃんのお家でパーティだよ！…でも、地球のお友達も呼ぶからリンク達は呼べなかつたの…」「めんね…」

リンク「いえいえ…クリスマスがどのようなものか今始めて知りましたし…、…スバル達は誰かと遊ぶ約束をしてるのか？」

とたん、その場に重い空気が流れ始める。

スバル・ティアナ「…ないわよつ！…あるわけないじゃんつ…！」

突然の悲痛の叫びにリンクとなのはが恐れおののく。

なのは「にやはは…任務どころで恋愛とか友達付き合つてどうじやないもんね…、困つたなあ…今日はもつ…なのに」

リンク「…？」

なのはが言つた言葉の最後はよく聞き取れなかつた。

機動六課に戻つたリンクとなのはは、はやて部隊長と会つた。

リンク「はやて部隊長、午後の任務ですが…」

はやて「無い」

スバル「…え？」

ティアナ「はやて部隊長、今なんて仰いました？」

はやて「午後の任務は無いと言つたんや、恋人とでも楽しく過ぐしてきや、それと明日も全日休みや、なんせ年に一度しかない特別や日やで？（二二二二）」

なのは「…にやはは…」

なのはは、とことん相手の気が読めない人だな、とはやてに思つた。

はやて「ほななのはちゃん、早く地球に戻つてパーティーしよー楽し
みやーつ！！」

なのは「ええつ！？はやてちゃん！まだ書類整理とかが…！」
はやて「そんなもん後々！早く遊ぶんやーつ！！」

はやてがなのはを軽く引きずりながら部屋から出て行こうとする。
なのは「あつ…リンク、スバル、ティアナ…メリークリスマス？」「
プシュー、バタン。

指揮室にはリンク達3人が残された。

リンク・スバル・ティアナ「（。。。）」「

クリスマスに予定なんか無い3人が、残された。

スバル「…どうしよつか」

指揮室にあるソファに3人は腰掛け、途方に暮れていた。

ティアナ「どうするもこうも、何も予定がないわ…、明日も全日休
暇？ありえないわ…」

するとリンクが言い放つた。

リンク「…遊びに行くか」

スバル・ティアナ「…え？」

スバルとティアナは何を言い出すんだコイツは、といつてリンク
を見る。

リンク「クリスマスつていうのは遊ぶ日なんだろ？機動六課は家族
同然の仲間だし…3人で遊びにいっても良いんじゃないか？」

スバル「…でもでもつ、リンはなんか予定は無いの？…こ、恋人と
か…」

リンク「さつきまでクリスマスを知らなかつた人間だぞ？恋人もな
んもあるかよ」

ティアナ「そういえばなんでリンクはクリスマスを知らなかつたの
？子供の頃両親からプレゼントを貰つたり、執務官学校でパーティー
に呼ばれたり…しなかつたの？」

リンク「んー、物心付いた頃には育ってくれた人は既に家に居なかつたし、市街地から家が遠かつたから自然になつてた木の実とかで小さい頃は食いつないでたし。学校に入つたら入つたで、ひたすら勉強ばかりして回りが目に入つてなかつたし…異様な雰囲気のせいで周りの人間も俺に声をかけづらかつたんじゃないかな…」

スバル「…リンのお母さんって見たこと無いけど」

リンク「ははっ、俺も覚えてねえよ、3歳頃から家に誰も居なくて、自然の中で暮らしてたんだからな…」

ティアナ「じゃあリンクが19歳つてことなのは…」

リンク「年齢の後に推定、つてつけたほうがいいんじゃねえか?つてたまに自分で思うわな」

スバル・ティアナ「…」

スバルとティアナはリンクのサバイバルな生い立ちに言葉を無くした。

リンク「まあ…この世の中のことについてまた新しいことを覚えた、つてことだな、で、どうする?遊びに行くか?」

スバル「うんつ!行く行く!」

ティアナ「…しあわせがないわね…行きましょつか…」

リンク「おっし、じゃあ決まり!30分後にエントランスな…先に行くぜ

「

午後1時15分。3人はミッドチルダに向かつて出発した。

リンク「へえ…さつきは急いでたからよく見なかつたけど、結構綺麗に装飾してあるんだな」

リンクは市街地の装飾に素直に感動する。

スバル「ホント…綺麗だねリン」

リンク「…お前の方が綺麗だよ(ボソッ)」

スバル「…つ…!…ななな…何言つてゐのさリンク!…/…/…/…」

リンク「あれ…聞こえちまつたか…」

ティアナ「…私が居るの忘れないでね？」

リンク・スバル「あ…」

ティアナ「まつたく…そこまであれ何なら、一人、付き合つちゃえ
ば？」

スバル「ふええつ！ティア！何を言い出すの…！」

リンク「ティアナ、悪い冗談は…」

ブラストキャリバー『さつきあんな事を吐いた貴方が言つことでは
ありませんね』

リンク「ブラスト…お前…」

マツハキャリバー『お一方はデートかなんかしないんですか？』

スバル「ししし…しないよ…！」

デバイスをにらみつける一人をみて、ティアナは嘆息する。

ティアナ「はあ…リンク！ちゃんとエスコートしてあげなさいよ…

私は一人で見たいものがあるから！」

スバル「…ええつ！？ティア！どこ行くのよーつ！」

ティアナ「二人で楽しみなさい…年に一度のク・リ・ス・マ・ス
」

そういう残しながらティアナは一人の前から颯爽と消えてしまった。

リンク「まじかよ…どうすりやいいんだ…」

スバル「うう…ティアのバカ…、…リン、い、行こう！」ガシッ

リンク「のわつ…？」

スバルが乱暴にリンクの手を取る。

スバル「あつ…／／／」

リンク「…自分から取つといて戸惑うつてどうなんだ…？まあ
いい、この人混みだ、離れ離れにならないように手を繋げ」つ…ちや
んとエスコートさせていただきますよ？スバル？（ニコッ）

スバル「…つ／／／、ははは…はいっ…！」

二人は手を繋いで、のんびりと市街地を歩き始めた。

ティアナ「はあ…結局一人なんだよね…」

その様子を物陰から見ていたティアナは大きなため息をついた。

「ん…そこにはいるのはティアナか？」

ティアナ「えつ…？」

ティアナが声のするほうに目を向けると、暖かそうな格好をした武装ヘリ操縦士、ヴァイスが居た。

ティアナ「ヴァイス…？何で此処に？」

ヴァイス「いやあ…航空隊もクリスマスだから休みになつちまつてさ…暇だから一人寂しくミッドチルダに出てきたつて所さ…、そういや、スバル達はどうした？一人みたいだが…」

ティアナ「ホントは3人で遊びに来たんだけどね…リンクとスバルのラブラブ度合いに耐えられないから逃げてきちゃった」

ヴァイス「なるほど…一人なんだよな？良かつたら俺と一緒に回らないか？」

ティアナ「なんであんたなんかと…まあいいわ、行きましょ」

ティアナは不貞腐れながら、しかし隣に人が居るという安心感に身を任せながら、市街地を歩いていった。

リンク「…さつき飯食つたよな？で、寒い冬になぜアイスクリームを食べる」

リンクは身近なベンチに腰掛け、手に持つている3段重ねのアイスクリームを見つめる。

スバル「ティアナとミッドに来た時に必ず食べるアイスなんだーっ！」

冬場でもやつてるから良いお店だし…それにデザートは別腹…！」

リンク「そういうものか…？あ、スバル、こっち向いて」

スバル「ん…？んぐっ」

リンクがスバルの口元についていたアイスを指で絡めとろつとすると、勢い余つてスバルの口に指が入つてしまつ。

リンク「あ…すまん、取ろうとしただけ…つてスバルッ！？」

ちゅるつ…れろれろ…

スバル「ん…リンクの指…おいしつ」

リンク「何をしてるんだおいつ…！ばかっ！／／／」

スバルの口元から手を外すと、スバルが不貞腐れたように言った。

スバル「ん…残念…」

リンク「何がだつ…！まつたく…」

リンクも手元のアイスを食べ始める。すると、

スバル「…リリリ…リンのアイスもおいしそう…！…食べちゃえーつ…！」

ぱくり。リンクが舐めていたアイスの反対側からスバルが齧り付く、当然二人は顔が極限まで近くなるわけで。

リンク「…つ…？げほっ…げほっ…！スバル！何をするんだ！」

スバル「だつてリンのアイスおいしそうだつたんだもん！代わりに私のアイスあげる！ほら…」

スバルはわざわざ自分が食べていた方を向けてからリンクに差し出す。当然そこに齧り付いたら間接キスになるわけで。

リンク「いやいやいや…いらん…！お前のアイスだ…自由に食え…！」

スバル「あれ…私のアイス…食べないの…？」

スバルが上目遣いでこちらを見てくる。幼い顔ながらも薄く上気した頬は妖艶さを醸し出していた。

スバルの顔が近づいてくる。顔との距離は数センチもない。

スバル「今度は…口で私の口元のアイスを舐めとつて…？」

リンク「スバ…ル…？」

二人は見つめ合い、そして口と口が

リンク「つて待て待て…！食べる…食べるから…」

リンクが折れた。焦るようにスバルのアイスに齧り付く。齧り付いた拍子に蒸せ、ゴホゴホと堰をしだす。

スバル「…リンの意氣地なし…」

スバルはスバルで、自分のやつたことに恥ずかしさを抱き、顔を伏せる。

エリオ「何やつてるんでしょうか…」

キヤロ「ティアナさんが居ないから…デデデ…デートかな…」

ティオール「りんにいとすばるねえ…あんなことを…はわわ…、邪魔しちゃいけないよエリオ、キヤロ、行こう?」

偶然にミッドチルダに遊びに来ていた3人組に見られた。この話題がなのはに伝わるまであと一日。

プラス・トキヤリバー『リンクとスバルは上手くやつてますかねえ…』
マツハキヤリバー『なんとも無駄な時間になりそうですが…』
ティアナのポケットでそんな会話をするデバイス2機。
ティアナが密かに別れた時に盗み取っていたのだ。
ティアナ『何2人で話してんのよ…』
盗んだ本人がげんなりとした。

アイスクリームを食べ終えた二人は今だ火照った頬ながら、街角の小さなジュエリーショップにやつてきた。

分かりにくいところにあるからだろうか。クリスマスイブなのに客は一人も折らず、綺麗な女性がカウンターで静かに本を読んでいた。
「いらっしゃい、こんな店に来るカツブルなんて珍しいね…好きに見ていいってね」

リンク「俺たちはカツブルじゃ…いいや、言い訳すんのも疲れた」

スバル「…リンク、いろんなジュエリーがあるよ…綺麗だね！」

リンク「初めてこんな店に入つたから良くなからんが…ああ、綺麗だな」

リンクとスバルは時折話しながら、ジュエリーを見て回つた。

スバル「…?リンク、これ…」

リンク「?どうした?…これは…」

とあるショーケースに入つていたペアリングに一人の目が留まつた。

「ああ……それは……製造工程で間違えたか……本来同じ宝石を入れるはずだつたんだが……一方にはサファイア、一方にはルビーを入れ込んでしまつてね……。色違いのペアリングになつちゃつて……ペアリングつて言えないね……ふふつ……」

スバル「確かにね……」

スバルはそのまま他のショーケースに目を移したが、リンクはすつとそのペアリングを見続けていた。

スバル「リンク……行こう?」

リンク「……あ、ああ、ちょっと先に店を出でていってくれないか? もうちょっと見たいんだ」

スバル「ジュエリーに興味を持ったの? 珍しいなあ……」

そういうながらスバルは店の外へ出でいく。

リンク「なあ……このペアリング、幾らだ?」

「ああ、そのペアリングかい? 不良品とまではいかないけど……どうせ卖れないんだ、……で良いよ」

リンクが手持ちの財布を見ると、その金額より余裕のあるお金が入っていた。

リンク「じゃあ頂こうかな」

「ふむ……なぜこのペアリングを買うんだい?」

店員は素直にリンクに問う。

リンク「さつき居たスバルつて奴の魔力光が蒼、俺の魔力光が紅なんだ、だから」

「なるほど……あの娘は、あんたの大事な人かい?」

リンク「いずれは、そうなるかもな」

「ふふつ……いい返事だ、安くしてやるよ、ほら、持つてきな」

リンク「……いいのか?」

「あの娘はきつと美しくなるよ、このペアリングと共に大事にして

やつてくれ

リンク「…ああ、言われなくても

店員とリンクは優しい微笑を浮かべた。

ガチャツ

スバル「遅かつたねえ…身体が冷えちゃつたよ…」

リンク「ああ…すまない…ほら」

バサツ

リンクの着ていた上着が無造作にスバルに被せられる。

スバル「わふ…リン、平氣なの？」

リンク「平氣平氣。なんならこつするぞ？」

リンクは背後からスバルに抱きついた。

スバル「リリリ…リンク！？何を…」

リンク「さつき俺を惑わせた仕返しだ…」

そう言うリンクはニコニコと微笑んでいた。

スバル「…リン…暖かいね…」

リンク「ああ…スバルもな」

二人は嬉しそうな笑みを浮かべ、進んでいった。

リンク「…ここは？」

スバル「ティアとミッドに遊びに来ると最後にいつも此処に寄るの

！どう！？綺麗でしょ？」

緩い坂道を登つた先、誰もこなさそうな高台で夕焼けを見つめる一
人が居た。

リンク「…綺麗だ」

夕焼けに照らされながらもイルミネーションが光り輝く市街地、葉
に光を反射させて輝く木々。そんな光景がスバルとリンクの前に広

がつた。

スバル「…うん」

リンクが横を向くと、風に髪を靡かせながら夕焼けを見つめる、綺麗なスバルの横顔が見えた。

リンク「…スバル。これ」

スバル「…？…これは？」

リンク「さっきのジュエリーショップで買つたんだ。店員さんが言つてた入れる宝石を間違えたペアリング、サファイアの方、買つてくれないかな？」

スバル「…いいの？」

リンク「ああ。スバルにあげる為に買つてきたんだから…」

スバルがリンクを抱きしめる。

リンク「…スバル？」

スバル「…ありがと。大事にするね。…リンク。付けて？」

リンクに左手が差し出される。

夕焼けに染まる高台で、リンクはスバルの左手薬指にリングを嵌め、自身のルビーの入つたリングをスバルに嵌めてもらつた。

スバル「リン…アイスクリームの時の続き…しょ？」

リンク「スバル…」

スバルとリンクは、そこで始めての口付けを、交わした。

先ほどよりも夜の藍色が広がつてきていた。

スバル「もう…夜になっちゃうね…」

リンク「あ…」

スバル「…寒くなつてきたし、帰ろうか…」

スバルが少し寂しそうにリンクに伝える。

リンク「帰りに何か買つて、管理局の休憩室で一人で食べるか？」

スバル「うん…！」

二人は寒い中、暖かい手を繋ぎ、帰路に付いた。

スバル「かんぱ～つ～！」

二人でコップを重ね、始めの一口を口に含む、その瞬間、リンクが口に含んだ液体の味に思わず顔を顰めた。

リンク「スバル…ツ…！…これ…酒じゃないか…！」

スバル「いいじゃんいいじゃん！本日は無礼講一つ…！」

リンク「こらつ…やめつ…」

二人きりのクリスマスナイト、酷いものだつたと言つておこう。

スバル「ん…もう食べられにや～」

リンク「お～い…スバルさん…？」

休憩室でスバルが酔つ払つて寝込んでしまつた。

リンク「つたく…しようがねえなあ…」

リンクは一人で片付けをし、スバルをお姫様抱っこする。

リンク「さて…スバルの部屋は…」

スバル「…あはあ～つ、夢にまで見たお姫様抱っこ～」
かぶり：

スバルが寝ぼけてリンクの耳たぶに喰らい付いた。

リンク「ちょつ…スバル…くすぐつた…！？」

ちゅるつ…ちゅぱ…れろ…

リンクの耳たぶがスバルの舌先によつて蹂躪されていく。
リンクはくすぐつたさと氣を保つので精一杯だつた。

やつとのことでスバルの部屋に着いたリンクは中に入り、スバルをベットに寝かす。

リンク「…つたく…やれやれ…俺も自分の部屋に…」

スバル「…やだつ…りんもいつしょにねるの…えいつ…ぐいつ…ばさつ…」

リンクがスバルに多いかぶさるように引っ張られる。

リンク「ちょちょちょ…つ！スバルさんつ！？」

スバル「んふふ…りんのだきまくら…ぎゅ～」

真正面から抱き合っているためかなり胸の感触がリンクに当たるわけ。

リンク「スバルッ…胸が…当たつて…！」

スバル「あてるんだも～ん！」

ぎゅうう～つ。さらに抱きしめられ、リンクの頭が混乱する。

リンク「スバル…これ以上はやばつ…」

スバル「…リンク…私の初めて…貰つて…？」

先ほどの酔っ払っていた顔ではなく、真剣に、そして林檎の様に頬を蒸氣させた顔を近づけられた。ひとたまりもない。

リンク「スバル

リンクの理性が落ちかかる。

ティアナ「はあ…今日は散々な日だつ…」

リンクは振り向く。

部屋のドアを開けこちらを向いて固まつてたティアナが見えた。

えーっと、状況確認。

艶美な目でこちらを見つめるスバル。

そのスバルに覆いかぶさる俺。

結論。

あれ、これやばくな？

ティアナ「あんたたち…なにしてるの…？」

リンク「い、誤解だーつ！」

スバル「ええ～つ、リンク、ヤル気満々だつたじや～ん

リンク「嘘吐くなつ…！」

ティアナ「あんたたち…ってか酒臭つ！！スバル…あんた飲んだわ
ねつ！！」

リンク「そうだ！スバルは酒を飲んでて寝ぼけて…」

ティアナ「女の子に酒飲ませて酔っ払ったところ襲うなんてありえ
ない！！最低！！」

リンク「違うんだあああああつ…………！」

次の日のクリスマスは一日中ティアナの説教だったこと、エリオたちの田撃証言でさらにつづいてティアナがさらに怒った事は言つまでもな
かつた。

ヴァイス「あれ？俺とティアナの話は？」「
あ、そこはめんどくさいんで割愛。

ヴァイス「…………」

終幕。

いいなーリンクとスバルいいなー（棒読み）

てことで特別編「二人の思い出クリスマス」でした。
前回正月の書かなきゃーなんていってたけどクリスマスがありましたね。

そんなリア充イベント忘れてましたよつーーー（泣）

そういえば嘘をんなのはのゲーム買いましたか？！？

主は喜びすぎて10時間ほどでストーリークリアしてキャラ全部開放して飽きたところです（え

あとはアーケードで全キャラのキャラビューアーを空けるのとスキルを集めの位しか…。

クリスマスなんて糞喰らえつーーーふんだつーーー

…とまあ童貞男子がブツクサ垂れていますが。

何はともあれ、メリークリスマスーーー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9420x/>

なのはStS再構成SS『COMBINATION ATTACK!!』

2011年12月25日13時49分発行